

## 後瀉雅生教授のご退職を記念して

後瀉雅生先生が六八歳を迎えられ、本学の定年規定により退職されることとなった。

先生がドイツ文学科の専任講師として本学に着任されたのは昭和五〇年四月であるから、以来今日に至るまで三〇年余、いわば半生を本学で教育・研究の仕事に捧げられたことになる。

先生の本学における勤務には、一つの大きな転機があった。本学文学部の再編成に際し、平成元年、ドイツ文学科が廃止され、先生の所属が社会学科に変わった。このドイツ文学科の廃止に関しては、後瀉先生がどんなお考えであったかを直接伺ったことはないが、不可抗力な時代の趨勢として受け入れられたものと思う。しかし、専門職である大学教員にとって、この種の変化を乗り切るのはかなり大変なことである。それまでに培われた専門能力の少なからぬ部分が役に立たなくなる。(これはフランス文学研究室の所属で、後瀉先生と同様の境遇に置かれた筆者自身の経験でもある。)しかし、《戦後》を超えて二一世紀に入り、激変する日本社会を見るに、ドイツ文学科の廃止は結局、活字文化の衰退を象徴する出来事であった。ドイツ文学科のみならず《文学科》そのものが、文学部内で成立しなくなり、多くの大学で廃止の憂き目にさらされたのである。

その後も文学部の改革が進み、社会学科から分離する形で平成一三年、文学部に新たに歴史文化学科が発足すると、後瀉先生は歴史文化学科の教授となられた。ドイツ文学出身の先生は、二度の変身を経験され、そのたびに講義科目が変わり、講義の準備が大変であったと想像する。

ドイツ文学科の教員として着任された後瀉先生は、ドイツ語を教える傍ら、ドイツ近代文学を講じられた。先生の論文に現れたご専門の研究歴は、ゲテ研究から始まり、二〇世紀両大戦間の不安の時代を代表するヘルマン・ブロッホへ移り、再びさかのぼってノヴァーリス、シュライアマッターを中心としたドイツ・ロマン派の研究へと広がっている。

筆者はドイツ文学とは無縁な門外漢であり、先生の研究業績を語る能力を持たないが、先生の研究は、文学研究ではあるが、その思考も文体も極めて哲学的である。その論文も、多くの文学研究者に見られる、自分が選んだ作家の個別作品の分析では

ない。先生の主要研究テーマであったプロツホ、この作家自身が文学の形象性より認識機能を重視した独特の創作技法を駆使し、ナチズムを生み出した彼の《時代》を《全体性》において把握することを自らの文学の使命としたようであるが、後瀉先生のプロツホ研究は、プロツホ文学の理解のみならず、プロツホが対象とした時代の問題性の全体を、プロツホを通しながら自らの視点で見極めたいという熱意に貫かれているように感じられる。このような研究態度はドイツ・ロマン主義研究にも共通し、拝読したご論文はロマン派の宗教意識の問題に焦点が絞られ、ロマン派を生み出したドイツ社会、その時代精神の全体の特徴を解明したいというスケールの大きさである。

後瀉先生がドイツ文学科の廃止後、社会学科、歴史文化学科と所属を変えながら、新たな環境に対応して教育・研究の仕事を定年まで見事に完遂されたのは、文学研究において既に現れている歴史と社会への並々ならぬ関心と該博な知識の蓄積があったからであろう。

歴史文化学科の所属となられてからは、先生は専門を《思想史》と位置づけられ、「西洋文明の諸問題」、「歴史と思想」、「文化交流史」、「現代史」、「日本学」など、多様な講義を担当された。そこにはドイツ文学は跡形もない。そして、先生の最後の研究業績も福澤諭吉研究となったが、プロツホ研究やロマン派研究の論文には西洋と日本との差異という問題意識が常に伺われる。福澤研究という形で、後瀉先生が日本回帰を遂げられたのは自然な成り行きのように思われる。

今、甲南大学を去られるにあたり、後瀉先生が後に残る者に残される記憶は、その人格からあふれ出る満身の熱意と誠意である。先生は、広域副専攻センター所長を始め、学内行政の各種委員会で重責を担われたが、熱意あふれる仕事ぶりは一貫している。歴史文化学科の会議では、特に学生指導に関して先生の人柄がおのずと現れ、その熱意にわれわれは時として圧倒されるほどであった。行き届いた学生指導とその熱意は、南山大学文学部卒業後、東京教育大学大学院へ進まれたという経歴とも無関係ではないであろう。先生は青年の教育を自分の人生の使命とも感じておられたのではないだろうか。

山歩きがご趣味の後瀉先生、いつまでも健脚を保ち、定年後の自由時間を十分楽しんでお過ごしください。

歴史文化学科の発足からたまたま籍を同じくし、五年という短期間のお付き合いしかなく、この種の送る言葉を書くには不適格な小生のつたない文章をご寛恕ください。

(川合清隆)